

夕&Eye

「原田さん、これから一番困ること何でしょうかねえ」

看護師が問いかけたこの一言が、原田太郎さん(68)の退院後の人生を変えた。二〇〇三年十月、原田さんは七沢リハビリテーション病院(神奈川県厚木市)での半年余りのリハビリを終えて、神奈川県愛川町の自宅に戻ってきた。

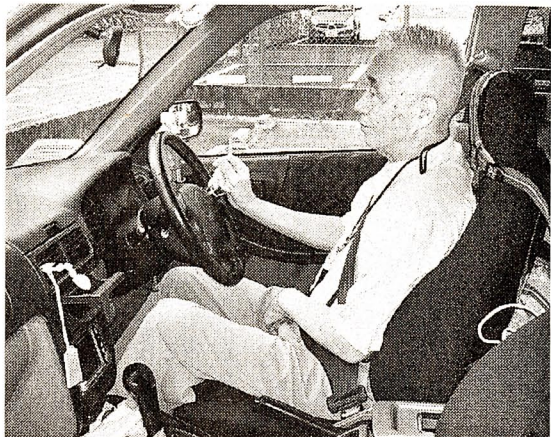
原田さんは脳卒中の一つ、脳出血の後遺症で左半身はマヒしたまま。右手でしか歯磨きができない。歯ブラシを持ったまま、もう一方の手でチューブから練り歯磨きを搾り出せない。帰宅すると、看護師の「困ること」の解決策にとり組んだ。一連

寄りそう
ケア

の動作が片手だけでできるよう手助けする歯磨きコップの開発である。

入院中は、看護師らの手助けがあったが、自宅に戻るとそうはいかない。では、自分で商品を製作してみよう。目標が定まると、起業家への道へまっしぐらだ。

原田さんが倒れたのは〇三年三月。起床してシャワーを浴びているとき、しびれが左足の親指から手に伝わってきた。「あれっ、おかしいな」と思っているうちに、左半身が動かなくなる。「携帯電話を取ろうとすると、体が傾いて床にゴロンと転がってしまった」。意識は確か。



ハンドルにノブをつけ片手でも運転できるようにした車で外出する原田さん

福祉用具 開発に奔走

脳卒中④(脳出血)

かろうじて救急車に乗り病院に向かった。

脳出血の診断を受けて二十日後に、車イスで七沢リハビリ病院に転院。すぐに病院のリハビリとは別に「自主トレ」に励み出す。それも病院関係者には黙ったまま。場所は、誰にも見つからないトイレの中だ。手すりにつかまって中腰になったり、しゃがんだり、屈伸したり。

だが、一カ月後に主治医に見つかってしまう。汗びっしりの姿で出会ったからだ。その主治医から「続けるなら、看護師の目が届く廊下でどうぞ」という温かい助言を得て、自主トレに一段と力を入れる。

周囲の患者たちから「よくやるね」と言われるほど、原田さんは懸命に取り組んだ。なぜか。「一日も早く元の体に戻って、厨房(ちゅうぼう)に入りたかった」

倒れるまで居酒屋のオーナー。愛称は「ケンさん」。酒と料理に囲まれ、客をもてなすのが性に合っていたし好きだった。調理の腕も上げた。大手の運送会社などに約三十年勤務した後、五十四歳の時に東京都渋谷区でまず定食屋を始めた。そして五年後に念願の居酒屋を同世田谷区で開店した。

「公務員だった父親が定年直後に一気に老け込んだ姿を見て、定年のない仕事をいつか始めよう」とずっと考えていた

脳卒中はこの夢を中断させた。それがはつきり分かったのは、退院一カ月前の「器具をつけましょう」という医師の宣告だった。足のねじれを戻すのがリハビリでは限界になると、器具が必要になる。もはや、厨房には立てない。

そこで、スパッと頭を切り替えることができたのは、看護師の一言だった。三年半かけてコップの開発に知恵を絞り、完成させた製品を「パラリンコップ」と名付ける。〇七年三月からネットを軸に販売を開始。メーカーとの折衝などで外出の機会も多く、そのため車の運転は欠かせない。ハンドルにノブを付けて片手で操作できるようにした。

最近「福祉用具機器研究開発の会」、脳卒中片マヒ良好生活倶楽部」などを設立し、新しい福祉用具の開発と普及に奔走する日々だ。外の空気を吸うことが自立の始まり」と高らかに笑いながら運転席についた。